

2020/10/18

ヨハネの福音書 講解メッセージ②⑩

『神の栄光を求める』ヨハネ 7:1-21

■わたしの時はまだ来っていない

「その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡りたいとは思われなかったからである。さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるよう、ここを去ってユダヤに行きなさい。自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」(ヨハネ 7:1-5)

この頃には、イエス様に共感を覚えて信じて従おうとする人たちと、イエス様のもとから去る人、怒りを覚えてイエス様を殺そうとする人たちに分かれています。イエス様は、イエス様に反感を抱く人たちの前に、あえて出ようとはせず、ユダヤを避けて生まれ故郷のガリラヤにおられました。時は、仮庵の祭りの直前です。仮庵の祭りとは、イスラエルがエジプトから脱出した後、40年間荒野で幕屋暮らしをすることになった時、神が守ってくださったことを感謝する盛大な祭りです。そんな時にガリラヤに引っ込んでいたイエス様に対して兄弟たちは、「お前が神の子や預言者だと言うなら、こんなところにはいないで公の場に行けよ」と言っています。これは、決してイエス様を応援しての言葉ではありません。兄弟たちもイエス様を信じてはいなかったからです。

「そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。」こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。」(ヨハネ 7:6-9)

「わたしの時」とは、十字架のことです。それは、アダムとエバが罪を犯した時から、神が計画しておられた時のことです。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

(創世記 3:15)

神様が人間を造った時、人間は永遠でした。しかし、悪魔が蛇を使ってアダムとエバを欺いて罪を犯させたので、この世界に死が入り、人間は朽ちるものとなりました。つまり、人間に死をもたらしたのは悪魔であって、神ではありません。神は、アダムとエバを罰するとは一言も言わず、むしろ救おうとしておられます。神は初めから一貫して、人を救おうと働きかけ続けておられるのです。神がさばく相手は、この世界に死を持ち込んだ悪魔であって、人ではありません。悪魔は、神であるイエス様を十字架にかけますが、その結果、人々は死の恐怖から解放されるのです。これが、キリストが来られた大きな目的です。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けて下さるのです。」（ヘブル 2:14-16）

これが「わたしの時」です。イエス様は、その時はまだ来ていないと言っておられるのです。イエス様は、「わたしが彼らの悪い行いを明らかにするので、彼らはわたしを憎み、殺そうとするが、わたしが預言を成就するときはまだ来ていない」と言って、ガリラヤにとどまられました。

■イエスはうそをついたのか

「しかし、兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にではなく、いわば内密に上って行かれた。」（ヨハネ 7:10）

イエス様は、「祭りには行かない」と言いながら、こっそりと出かけて行きました。これは、イエス様がうそをついたことになるのでしょうか。

倫理学という学問がありますが、倫理は「原則倫理」と「状況倫理」とに分けられます。法律学者は原則倫理を適用しており、たとえば、安息日に仕事をしてはいけないという原則に違反することは罪になります。それで、彼らは激怒したのです。私たちの考え方は、だいたい原則倫理に基づいています。この考え方では、原則に違反するとうそをついたこととなります。

しかし、イエス様の倫理の持ち方は、状況倫理です。簡単に言うと、すべてにおいて愛を優先するという倫理です。よくたとえに使われる例として、村を救うために我が子を殺してしまった母親の例が挙げられます。かつてアメリカで、ネイティブアメリカンと白人が戦っていた時代、ネイティブアメリカンの襲撃から逃れた女性と子どもたちの隠れ場所で、赤ちゃんが泣き止まないという事態が起きました。何をやっても赤ちゃんは泣き止まず、ついにその母親は、我が子の鼻と口を押さえ、声を立てられないようにしました。しかし、その

結果、その赤ちゃんは死んでしまったのです。状況倫理で考えれば、この母親は殺人を犯したのですから、縛り首にされるべきです。しかし、それが正しいことなのでしょうか。別の村では、同様の出来事で隠れ場所がわかってしまい、全員殺されてしまった例もあったのです。

現代でも、テロなどの際、多くの人の命を優先すべきか、一人の人の命を救うために多くの犠牲を払うべきか、高度な判断が要求される場面があります。これが状況倫理です。神様にとって判断の基準にする一番の優先事項は愛です。

当時ユダヤ人はイエス様を殺そうとしていましたから、イエス様が祭りに行くことがわかったら、彼らは必ず殺しに来たことでしょう。それで、イエス様は「わたしの時はまだ来ていません」と、まだその時ではないし、彼らに殺人を犯させるのも良くないと判断なさったのです。彼らが罪を犯さないように助けるという判断が優先されたのです。

■なぜ周りを恐れて自分の気持ちを明かさないのか

「ユダヤ人たちは、祭りのとき、「あの方はどこにおられるのか」と言って、イエスを捜していた。そして群衆の間には、イエスについて、いろいろとひそひそ話がされていた。「良い人だ」と言う者もあり、「違う。群衆を惑わしているのだ」と言う者もいた。しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はひとりもいなかった。」（ヨハネ 7:11-13）

当時、イエス様について群衆の意見はさまざまでしたが、律法学者を恐れて、誰も公に自分の意見を言う人はいませんでした。律法学者は、当時のユダヤで最も力を持っていた人々です。

人の目を気にして恐れ、自分の本当の気持ちを明かさないのは、全世界、時代を越えて共通しています。すべての人は、時代も国も関係なく、「愛されたい」「よく思われたい」と思っているからです。それは、神の愛を感じ取ることができなくなったことに起因します。人間は本来神と一つでしたから、私たちは潜在意識の中では神の愛を知っています。ところが、死が入り込んで朽ちるものとなった人間は、朽ちない神が見えなくなってしまったため、神の愛を五感で感じ取ることができなくなりました。本来愛されるべき愛を受け取れないという不安から逃れるために、私たちは必死になって愛されようとしているのです。

「しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた。ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか。」」（ヨハネ 7:14-15）

イエス様は神ご自身ですから、神の国について知っておられるのは当然です。しかし、この地上での肩書が何もなかったため、人々は非常に驚きました。なぜ人は、肩書などのうわ

べで人を判断するのでしょうか。

私たちの行動のすべては、反対する運動によって支えられています。物理ではこれを作用反作用の法則と言います。ボートをこぐ時、水を後ろ向きに押すと、その水がこちら側に押し返してくる力が働いて、ボートは前に進みます。ロケットの打ち上げも、燃焼ガスで地面を押す力によって、ロケットは宇宙に飛び立ちます。

人の心もこれと同様で、頑張ろうと思うのは、自分はダメだと思うからです。愛されたいと思うのは、愛されていないと思っているからです。愛されていないと思う理由は、自分に愛されるべき価値が見つからないからです。私たちは神のいのちによって造られ、神と同じ価値があると言われても、死が入り込んだことによって、それがまったく見えません。その結果、見えるうわべで人の価値を判断するようになったのです。

これはアダムとエバの時代からずっと変わりません。死が入った直後、二人は自分たちが裸であることを意識するようになり、腰の覆いを作りました。つまり、自分の姿を見て恥ずかしいと思い、恐れて、うわべを何かで飾ろうとするようになったのです。その結果、私たちは今も習慣的に人をうわべで見、自分を見ることを恐れています。

「そこでイエスは彼らに答えて言われた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。」（ヨハネ 7:16-17）

私たちは神のいのちをいただいて造られています。だから、私たちの魂は常に神の語り掛けを聞いており、潜在意識はそのことを知っています。ということは、人が本気で神に従って神を求めるなら、それが本当に神の教えかどうか意識できるようになります。誰でも本当に自分の心の声に聞き従うなら、聖書の教えが本当であることがわかるのです。

■神の栄光を求めるとは

「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。モーセがあなたがたに律法を与えただけではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのですか。」イエスは彼らに答えて言われた。「わたしは一つのわざをしました。それであなたがたはみな驚いています。」（ヨハネ 7:18-21）

あなたは自分の栄光を求めて生きていくのでしょうか、それとも、神の栄光を求めて生きていくのでしょうか。神の栄光を求めるとは、美辞麗句を並べて神をほめたたえることでも、

神のために頑張ることでもありません。神の恵みを求め、神の恵みを受けとること、つまり、神と共に生きる生き方、それが神の栄光を求める生きかたです。あなたは、祈りの中で、決まった言葉を並べて祈ることで、役目を果たしたとっていないのでしょうか。

自分の栄光を求めると、自分を立派に見せたり、取り繕ったりしなくてはなりません。人をさばかなくてはいけないので、不正があります。しかし、神の栄光のために生きる者は、人をさばきません。自分が赦されたことを知っているからです。神の栄光を求める者には真実があり、そこには希望があります。

神は、「わたしに近づきなさい」と語っておられます。主に近づくことと、主のためにがんばるのは、何が違うのでしょうか。神に近づくとは、神との距離感を縮めることです。人は、距離の近い人には本音を言いますが、距離の遠い人には本音を語りません。神に近づく人は、自分の弱さや罪を言い表すようになります。神は私たちを友と呼ばれました。神に憐れみと助けを求めて、その前に重荷を持ってきて、休ませてもらうこと、それが神の栄光を求める生きかたなのです。

神の前に頑張る必要はありません。ただ正直になればよいのです。私たちは神のいのちの上に造られており、神と一心同体です。ですから、キリストは私たちの重荷を背負い、私たちにはキリストが持っている恵みを背負うように言われます。「わたしのものはおまえのものだ。」と神は語り、あなたが持っている負債はわたしに貸しなさい、と言われます。このことを正しく理解し、神に重荷を差し出し、神の恵みを受け取ることが神と共に生きることであり、神の栄光を求めて生きることなのです。